

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 33 2013年3月号

- 彫刻家の描いた絵本 『おおきなかぶ』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 里見 まり子
- ねずみに始まり、ねずみに終わる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 藤田 博
- 『ないた赤おに』——中学生を引き込むその世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 西川 洋平
- 勇気をくれ、背中を押してくれるこの一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 内海 友里恵
- 新刊紹介・・ 藤田 博

■彫刻家の描いた絵本『おおきなかぶ』

里見 まり子

図書館で久しぶりに絵本を借りました。『おおきなかぶ』です。背表紙がポロポロにはがれて、緑のテープで補修されていました。多くの人々に貸し出され、時には、子どもたちに読み聞かせられていたに違いありません。



うんとこしょ どっこいしょ ところが かぶは ぬけません。
うんとこしょ どっこいしょ それでも かぶは ぬけません。

これを繰り返し読んでみると、不思議と子どもたちの声が聞こえてくるのです。

いつ頃この絵本に出会ったのかははっきり覚えていないのですが、仙台に引っ越してから、宮城県美術館の図書室の前の壁に挿絵が掛けられているのを見て、佐藤忠良氏によって描かれたことを知りました。

赤っぽい大きなおじいさんの鼻、そして真っ白いあごひげをたっぷりとたくわえた彫りの深い顔、スカーフをかぶったおばあさんと孫娘の姿などから、海外の作家によって描かれたものとずっと思っていたのです。

佐藤氏について書かれたいくつかの文章を読む機会があり、氏がシベリアでの抑留体験を持ち、厳しい労働に耐えながらもロシア人を眼だけでデッサンされていたことを知りました。そして、いかなる時も描くことを追求し続けられた氏の姿勢から、ロシアの風土を感じさせるこの挿絵が生まれたのだと納得したのです。

おじいさんはある時は顎を引き、ある時は顎を上げてかぶを引っ張っています。おばあさんはいつも背中を丸め、孫娘は腰を伸ばして反り返ったり、腰を曲げたり、横を向いたりしています。犬や猫の恰好からもかぶを引っ張るエネルギーがリアルに伝わってきます。氏は、この挿絵の制作に当たって、自ら鏡に向かって引っばるポーズをして、何度も描き直したと語っておられたとも書かれていました。

とてつもなくおおきなかぶができたとき、おじいさんは、左脚を挙げて左手の親指を立てて踊ります。そしておおきなかぶが抜けたとき、右脚を高く上げ、おばあさんと肩を組んで踊ります。その踊りの恰好は、本当におじいさんらしく自然で、叫び声や喜びがじんわりと伝わってきます。この二つの挿絵を見ながら、氏が鏡の前でおじいさんになり切って踊っておられる姿を想像していました。

佐藤忠良氏は、宮城県に生まれ、ロダンの作品にあこがれて彫刻家を志したそうです。一周忌となる昨年は生誕100年でもあり、追悼の展覧会が宮城県美術館で開かれました。この展覧会を訪れて、氏が『おおきなかぶ』だけではなく、『ゆきむすめ』や『イソップのおはなし』など何冊もの絵本の挿絵を描いておられることを知りました。

最後の部屋に展示されていた『おおきなかぶ』の原画の前に立ったとき、これらの絵が「うんとこしょ どっこいしょ」と叫びながら動き出したくなる子どものエネルギーを引き出す力を持っていることを実感しました。

『おおきなかぶ』のブロンズリーフが宮城県こども病院にあることを聞きました。是非行ってみたいと思っています。

■ねずみに始まり、ねずみに終わる

藤田 博

望月新三郎文・二俣英五郎絵『ねずみ にわとり ねこ いたち』(ポプラ社)は、「ねこと ねずみが まだ なかが よかった ころの はなし」です。ねことねずみは仇敵、「なかよし」などではあり得ないのを知っている、知っているからこそその「はなし」です。二階のおそなえ餅を食べようとした「ねずみ にわとり ねこ いたち」が、階段に並んでその順に受け取ることに。階段という高さ、後先の順番は、語呂合わせのためだけのもの、高さはあっても高さの違いはなく、順番はあっても順番の違いはありません。ねずみが小さい方のおそなえ餅を「しっぽに からげて ひっぱって」きて、順に手渡していきます。二つ目は、「おもたくて おおきくて、ようやくひきずってき」たものの、「てが すべって、ごろん ごろん ごろん。」頭に当たったいたちは、「お お いたち お お いたち」と泣きました。「にやんともない にやんともない。」といたちをなぐさめるねこ、「と とつかしいからだ。と とつかしいからだ。」とねずみをはやし立てるにわとり。ねずみは頭に手をやって、「うん ちーつと ちゅういが たらなかったかな。」一番下のいたちから、ねずみへと戻ってくる形になっているのがわかる、同時に、ねずみの尻尾に始まり、頭に終わるのがわかるのです。



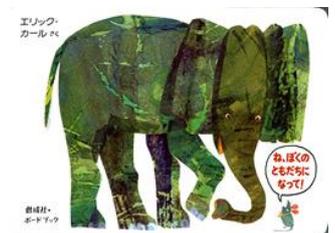
丸くなったねこの上に丸くなってねずみは眠ります。「なかよし」のねことねずみへと戻るのです。おそなえ餅は年の始めのもの、丸いおそなえ餅をねずみが引く、そこから始まったのは、丸と始め、双方の意味があつてのことなのです。



「かわいい むすめを ねずみなんかに やれっか」、縁談を持ってきた「しんるいのおじさん」に「おとつあん」はそう言います。やれるとすれば、「せかいで いちばん えれえむこののだ。さしずめ おてんとうさまかのう。」おじさんは、おてんとうさまのところへ出かけます。「むすめを もらって もらえめえか。」おてんとうさまは言います、「せかいで いちばんなら くもどんだ。くもが でてくりやあ、わしが どんなに がんばっても たちまち ひかりは うすれてしまう。」おじさんはくものところへ出かけます。「せかいいち は かぜどんだ。どんなに わたしが がんばっても、かぜが ひとふきたら、てんにはいられなくなる。」その後、風のところに。その後、壁のところに。壁は言います、「せかいで いちばんは、ねずみに きまっとる。おれが いくら がんばってもよ。ねずみに かじられたら あなが あく。」「せかいで いちばんえれえのは、おらたちってことかよ」、そう言っておじさんは戻ってきます。

回り回ってねずみへと戻り、ねずみはねずみに嫁入りするのです。「ゾウとねずみ」、「ライオンとねずみ」の組み合わせに見られるように、小さく、弱いものの代表であるねずみが一番強い、さかさまが生まれています。さかさまは元へと戻る円環と一つのもの。岩崎京子文・二俣英五郎絵『ねずみのよめいり』(教育画劇)が描く、循環型を代表する「ねずみの嫁入り」の昔話です。

エリック・カール作『ね、ぼくのともだちになって!』(偕成社)のねずみは、「ね、ぼくのともだちになって!」と馬、その尻尾に声をかけます。次にワニ、その尻尾に声をかけ、ライオンに、カバに、アシカに、サルに、クジャに、きつねに、カンガルーに、キリンにとつづけます。最後は、声などかけていないヘビが動き出します。このヘビは最初から見えていた、どこにも見えていた、見えていて見えなかったものなのです。その意味でこれはヘビに始まり、ヘビに終わるとの言い方も可能です。ヘビに驚いたねずみは、ねずみとともだちに——尻尾に声をかけたことによって、頭に、つまりは最初に戻ったのです。



順に声をかけていく、それでいながら決まっていた元へと戻る、「ねずみの嫁入り」と同じ形になっています。違うのは、ヘビがいること。自分の尻尾を自分で飲み込むウロボロス、円環を象徴するものとしてのヘビが、決まっている元へと戻る円環の象徴となっているのです。

※ねずみ にわとり ねこ いたち／望月新三郎文／二俣英五郎絵／ポプラ社

※ねずみのよめいり／岩崎京子文／二俣英五郎絵／教育画劇

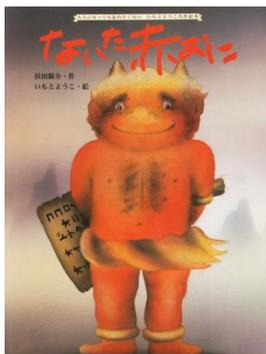
※ね、ぼくのともだちになって!／エリック・カール作／偕成社

(英語教育講座)

■ 『ないた赤おに』 ——中学生を引き込むその世界

西川 洋平

私は、理科を担当しています。絵本を理科で使うというのも、何かの化学変化を起こしてくれそうではあるのですが、私の創造力の外の話です。一つだけ、道徳の授業で使った絵本があるのを思い出しました。『ないた赤おに』です。読み聞かせながら授業を進めていく方法もあると思いますが、私は場面を表す「絵」として、いもとようこさんの絵を使いました。本文は多少簡略化し、文字だけ別のプリントに印刷をして資料としました。この作品は中学校でも道徳の資料として用いられることがよくあります。この実践では、自分の損得ではなく相手の幸せを願う気持ちの尊さを理解させ、自分もそうありたいと願う心情を育てることをねらいとしました。



この絵本は、友だち同士の赤おにと青おにが織りなすドラマを描いています。おには人間と距離をとって暮らしています。人間にとって、おには恐ろしい存在以外の何ものでもありません。けれども、赤おには人間と仲良くしたいと思っています。仲良くするきっかけづくりを考えてみても上手くいきません。赤おにの姿を見ると人間はすぐに逃げてしまうからです。赤おには荒れていました。そんな赤おにに、あるはかりごとを青おにが提案します。青おにが村で暴れて人間を困らせ、赤おにが青おにを退治して人間を助けることで、赤おにが人間から大事にされるようになるというものでした。赤おには葛藤しますが、最終的には青おにのはかりごと通りに事が進みます。赤おに

は人間と仲良くなることができました。喜びの日々の中、青おにに会っていないことに気がきます。青おにの家を訪ねた赤おにには、張り紙を目にします。そこには、赤おにと人間が仲良く暮らして欲しいこと、自分と一緒にいると赤おには人間から悪く思われるから自分は旅に出ること、赤おにのことはいつまでも忘れないこと、赤おにの体を案じていること、どこまでも友だちであることが書かれていたのです。張り紙を読んだ赤おにが号泣して終わります。

授業を考えるに当たって、ひとつの不安がありました。中学生を絵本で引き付けられるのかというものです。朝の教室で、絵本を読んでいる生徒は見たことがなかったことがその理由です。私も、中学生になってからはほとんど読んだ経験がありません。絵本を自宅で読んでいる生徒もいると思いますが、朝読書で読んでいる本の多くは小説です。ライトノベルや本屋さんに平積みされている文庫、映画・マンガのノベライズなどが人気を集めています。

実際に授業を行った時の生徒の様子は、その不安を払拭するのに十分なものでした。このストーリーには、青おにの友情から生まれる赤おにの悲しみがよく表れています。生徒にとって共感できる場面があるものの、自分ならそうできるかについて考えを深めることが可能な資料だと改めて感じました。いもとようこさんの絵が素晴らしく、場面を捉えるだけでなく、心情に訴えかける独特の雰囲気があります。そのコラボレーションによって、生徒たちはこの作品の世界に引き込まれていったと思われま。授業の後には、実物の絵本を見たいという生徒も出てきました。絵本の持つ力の大きさを感じる一瞬です。

今回は道徳の授業で取り入れてみましたが、より気軽にできる可能性があると思っています。朝のつどいや帰りのつどい、学級活動などに絵本を入れれば、生徒を引き付けることができるかもしれません。絵本は、読み手に生き方や在り方を問いかけてきます。それは、私たち大人にも、何かのヒントを与えてくれるものなのかもしれません。読み聞かせを教室でしたくても、40人の生徒に見せるなら、一冊の絵本は字も絵も小さ過ぎます。絵本を投影して映し出したり、ICT機器を活用することで、絵本の可能性はさらに広がるのではないのでしょうか。

※ないた赤おに／浜田廣介作／いもとようこ絵／金の星社

(附属中学校教諭)

■勇気をくれ、背中を押してくれるこの一冊

林 明子作『こんとあき』（福音館書店）

内海 友里恵

赤ちゃんのお守りをするために「さきゅうまち」からやってきたきつねのぬいぐるみ、それがこんです。生まれた赤ちゃんの名前は「あき」。「こんとあきは、いつも いっしょに あそんで、あきは だんだん おおきくなります。あきが成長していくにつれて、「こんは、だんだん ふるくな」るのです。ある日、ほころびた腕をおばあちゃんに直してもらうため、二人は「さきゅうまち」へと電車で出かけます。

途中の駅でお弁当を買いに行ったこんを心配するあき。こんはしっぽをドアに挟まれながらも、お弁当を持って立っていました。そしていつものことばを言うのです。「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」おばあちゃんの家に行く前に、砂丘へ寄り道。突然出てきた犬にこんはさらわれてしまいます。あきは、砂の中にあるこんを掘り出し、「こんをおぶって、すなのやまを おり」、おばあちゃんの家までたどり着きます。こんの手も足も腕も、おばあちゃんがすっかり直してくれました。「つぶれたしっぽには、おふろが いちばん！」そう言って三人でお風呂に入ります。お風呂から上がったこんは「できたてのように きれいな きつねに なり」、次の次の日、あきとうちへ帰るのです。

これは、私が小さい頃に読んだ、今でも忘れられない大好きな本です。初めての遠出、電車の窓から見る景色、何もかもが真新しく胸がドキドキする思いが、あきの表情から伝わってくるからです。始めはこんに付いていくことしか出来なかったあきが、こんをおんぶして、おばあちゃんに直してもらう——「わたしがしっかりしなきゃ」との強い思いが旅の中で育っていくのです。こんが繰り返す「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」は、私に勇気をくれる、背中を押してくれるような気がするのです。

（英語コミュニケーションコース 4年）



■ 新刊紹介

小手鞠るい作・たかすかずみ絵『お手紙ありがとう』（WAVE 出版）



「ボールがあたったところは、いたくないですか。」「わたしのスケッチにつきあってくれて、ほんとうにありがとう。」「めそめそ泣いていたわたしに、あなたはやさしく、力強く、声をかけてくれました。」このそれぞれが誰に宛てて書かれたものかわからない、「あなた」とは誰かがわからない形になっています。わかってくるのはその後の「旅人」からの手紙によってです。「『ただいま』そう言って、ぼくが、きみを見あげると、『おかえり』そう言って、きみは、ぼくを見おろします。」「あなた」も「きみ」も木、すべてが木に宛てた手紙なのです。「ただだまって、そこに立っているだけしかできない」もの言わぬ木、もの言わぬものへの手紙、当然のことながら返事はありません。それでいて返事はある、木に伝えた思いが「応え」となって戻ってくるからです。「つかれたら、またここにもどってきて、きみをだきしめてもいいですか。」「ここに立つのは命の木、巡る季節の真ん中に立ちつづける一本の樫の木なのです。

旅人のこの手紙が真ん中、「まつもとうじ」と「ほしのえりか」、「川崎真木子」の最初の手紙と二通目の手紙の真ん中に置かれています。四人のその真ん中に木はあるのです。その木がスポーツセンターを造るのに「じゃまだから」を理由に、切り倒されてしまうこととなります。「ぼくの心から、葉っぱがぜんぶちって、心がはだかになってしまったような気がします。」これは、まつもとうじ、「あなたがいなくなったら、わたしは、だれの絵をあげばいいのでしょうか。」これは、ほしのえりか、「こんなかなしいことがあって、いいのでしょうか。」これは、川崎真木子です。

川崎真木子が小学生のときの校長先生に手紙を書きます。「お手紙ありがとう」に始まる校長先生からの返信、それが木からの手紙に思えてきます。空襲によってすべてが焼き尽くされた中、「あの木だけが、・・・たおれることなく、しっかりと、立っていたのです。」焼け野原に、子どもたちがその木のどんぐりを植える、一人が校長先生のお父さんだったのです。「希望の木」を残すため、多くの人に手紙で呼びかけることを勧めます。「手紙はどんどんふえるでしょう。まるで枝に葉がしげるように。葉と葉のあいだから、つぼみが出て、花がさくように。」木の周りには決まって人のつながりがつくり出される、知らない者同士が木への手紙によってつながっていくのです。

（藤田 博）

（発行：宮城教育大学附属図書館）